カトリーナの残したもの

カトリーナ旋風がやっと過ぎたと思ったら、この暴風雨でニューオリンズの土地が陥没し、元々地盤が海抜よりも低かったところに湖の堤防も決壊、地域一体は洪水という最悪の事態になったらしい。アイダホ、モンタナ、ワイオミングと昔からの原生林がそのまま残っているような北西部をひたすら運転するだけというのを幸い、私はラジオのトーク・ショウを集中的に聞き始めた。ラッシュ・リンボウ、とか、マイク・ギャラガーといった、なじみのホストのチャンネルを中心に、一般の人達の生の声を聞く。尤も個性の強い（アクのつよい）ホストの場合は中々反対意見は出てこないことも判った。

意見は集中的にカトリーナの起こした惨状と、政府の対応だ。

台風は自然現象であるから、それについては誰も責任は負えない。とはいえ、その後の援助については、ニューオリンズ市長、ルイジアナ州知事、FEMA（連邦緊急事態管理庁）、大統領のどれかというのに意見が分かれた。

私は単純に当地の行政府が直轄の責任担当だろうと思ったのだ。ところが、一番批判されたのは FEMA と大統領。何故州や市長は批判されないのか？これは

1. 州知事と市長は民主党であるのに対し大統領は共和党と政党が違う（ので協力的ではなかった）、
2. 州が複数に跨っている場合は連邦政府の仕事である、
3. 一般市民が投票権を行使できるのは大統領だけである（州知事を選べるのは州民のみで他州の人は口を出せないからという理屈）

という理由らしい。

また、こうした場合出て来る議論の常で被害にあったのが白人地域であったら救護ももっと早かっただろう、という意見も噴出した。

台風が3段階から5段階に移行したのはほんの一日それも急激にである。誰が責任者でも混乱は避けられなかっただろう。それでもラジオで FEMA、大統領を批判し始めたのは、台風の後、2、3 日して直ぐである。日本の兵庫・阪神大地震の時、僅か 2、3日で直ぐに全国民から日本の政府・県知事が批判されたという記憶は無いのだが。

確かに FEMA については正直、批判されても仕方の無いほど、トンチンカンな対応と機動力の無さが露呈された。挙句の果てには FEMA 長官の職歴詐称（大学の時無給で地方役所の手伝いをしたのを、地方行政のアシスタントと、職歴欄に書いた、とか）までラジオで暴露され結局更迭された。

一方、不思議なのはルイジアナ州知事を批判する声が極めて少なかったことだ。連邦政府の緊急部隊は州知事の要請が無ければ出動出来ないのに知事が出動要請したのが遅かったとか、又、避難民の集まったテキサス・ヒューストンのドームに援助物資を運びいれようとしたら、ドームに食料が行くと判ったら、余計に避難民が集まるから辞めてくれと言ったとか、事実であれば人命救助の観点からは、とても及第点をあげられるとは思えなかったのだが。

ルイジアナ州の中でも今回一番被害の酷かった区域は、南部の中でも歴史的に奴隷解放に遅れ、教育も職業訓練も儘ならず、親子代々行政の福祉補助金で生活をしてきた家族が多くいたという。この際、自助努力精神を育てるべきではないか、という意見が聞かれたのもこのトーク・ショウによってであった。台風の被害を報道しようと集まったテレビ記者が被害住民にマイクをさし出したら、「今まで補助を受け取っていた役所の窓口も流されちゃって、一体これから私のところにくる請求書は、誰が払うのよ。」といった住民の言葉がアメリカ全土に流れ、それに反発を感じた真面目で勤勉な人からは、「自分の請求書なんて自分が払うに決まっているだろうに。何考えているんだ。」という意見がワッと出てきたりして、アメリカの抱える問題点がカトリーナによって一挙に白日の下に曝されたとも言える。

アメリカの良いところは、どのような意見であろうと誰に遠慮するでなく、堂々と述べられること、又、問題意識がかなり広範囲に渡って共通項として存在し得るということだと思う。意見を言うことによって、手足や命を失ったり牢獄に行くという恐れなしに。

カトリーナを契機に国民が国とは何かとか、政治・行政の役割と限界を考え、自分達の生活自体を振り返ることが出来るなら、被害総額以上のメリットは必ず出てくるのではないだろうか。

人生で遅まきながら、又、被害者には気の毒ではあるが、私にとってこの旅の一番の収穫は、曲がり角にあるアメリカの万華鏡を垣間みることが出来たということだと思う。

大統領の顔

サウスダコタ州のラピッド・シティは、あの、ヒッチコックの「北北西に進路を取れ」でおなじみの、大統領の顔を刻んだマウント・ラシュモアのあるところだった。早速行ってみる。ここも国立公園の一部で立派な展望ルートがついた観光館が出来ている。遥かに見えるマウント・ラシュモアを見上げると、4 名の大統領が遥か山の壁面から地平線を越えて世界を睥睨しているのに出会う。

ところで、ワシントン、リンカーン、ジェファーソン、と、ここまでは、アメリカを代表する大統領として納得がいく。でも最後のセオドーア・ルーズベルトとなると何故だろうと私はずっと思っていたのだ。ここで歴史的背景や山の側面を削っていく作業の説明映画をみて判ったのだが、この 4 人に決めたのはロダンの弟子でもあった彫刻家のグゾン・ボーグラムで、4 人は、それぞれ、国の誕生・成長・遵守・発展を代表し、だから 20 世紀初頭に大統領になったルーズベルトは発展のシンボルとして選んだそうな。

今も、この 4 人の大統領はアメリカ人のよって立つ精神的基盤となっているといわれている。これら物言わぬ大統領は今回のハリケーン後の騒動をどう思っているのだろうか。

ところで、この近くは、アメリカでも有数な自然保存地区でイェローストーンが有名であるが、野生のバッファローが悠然と生きているのをみることが出来るキャンプ地でもある。西部劇に出てくるバッファロ・ービル（バッファローの肉を鉄道労務者に売っていた）は第五騎兵隊の隊員としても土地の名士だし。だからアイダホ、モンタナ、ワイオミングといったところは家族でキャンプをするとか山小屋で過ごすなどが一般的で、自然観測が目的でない私のような行きずりの旅人用のホテル・モテルは余り無いのも頷けた。

コーン・パラス

マウント・ラシュモアのパンフレットの隣にあったのが、コーン・パレス

のパンフレット。写真はカラフルなお城である。農場に行くと判るが、トウモロコシというのは、赤、茶、黄、緑、黒、白、紫と多くの色があるのだが、その実を削ぎ取った残りの芯の部分の色を使って宮殿の壁画を描いている。実際にはトウモロコシばかりでなく他の穀物も使っているとか。100 年以上昔から農産物の豊穣を展示するのが目的でパラスが創られ、過去には海外の国際博覧会に展示したり、今も毎年壁画を造り変えているという。丁度フェアをやっていた。

とはいえ、何とも淋しいフェア。

NYのストリートフェアのような賑わいも喧騒もない。時代の移り変わりだろうか。パラスの中には昔国際博覧会に展示された華麗なパラスの写真が展示されている。そこに窺われる生身の労働としての活力に比べて、農業が高度化した社会では昔ながらのパラスに懸ける情熱を受け止める場所ではなくなった、と言っては酷か。

フェアとは
名ばかり？